

曹洞俳壇

選・坊城 俊樹

鬼灯の紅うるむ母との日

愛知県 宇佐見和子

評 作者が幼少のころの母との日々のことだろう。鬼灯市へ行ったときの場面かもしれぬ。「紅」は「くれない」と読ませる。その「紅さ」「こそが女の子と母の楽しかった思い出の色彩としての象徴なのかもしれない。

浮きたがるボール沈めり水遊び

愛知県 大竹 妙子

評 「水遊び」は夏の季題。むろん子どもたちの遊びで、若者たちの海辺の遊びには適さない。何度もボールを沈めては浮いてくる遊びはなんとなく記憶の底にある。現代の子も昔の子も同じ遊びをしていることの嬉しさ。

◆奥の院より白靴に泥つけて 愛媛県 井上 征郎

◆竜宮に水母は骨を忘れ来し 北海道 堺 隆

◆山門の地蔵に梅雨の話など 三重県 苅屋奈良美

◆ファープルの少年の飼ふ甲虫 東京都 長谷川 瞳

◆世の裏を教へてくれたサンダラス 福島県 鈴木嘉志雄

◆六月や花屋の花の娘たち 埼玉県 尾内 達也

◆苗植ゑて殺生の日々始まりし 岐阜県 大下 雅子

◆野地蔵の二つ並びて蓮の花 福井県 高島 員子

◆薪のごと露負う老婆山下的 岩手県 関合 新一

◆売言葉買言葉とふ夕端居^{ゆうはし} 静岡県 土屋 君女

*選者吟

夕焼を墮ちてしまひし夕日かな

俊 樹

*作句小見

どちらかといえば海の句である。夏の海は子どもや若者たちで賑わう。しかし黄昏時となり、そして水平線の彼方についてに墮ちてしまった夕日。しかし深紅の夕焼けはまだ水平線をかこんでいる。夏の終焉をも予感した句。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

鷗外の「石見人」とは如何なるや考へてゐる津和野に生まれて

島根県 横山 豪吾

評 森鷗外は島根県津和野生まれの石見国いづみのくにの人。軍医として封建的な医学の改革を目指す一方、多彩な文学活動も展開して日本の近代化に尽くした人。同郷の偉人へ敬意を抱きつつ自分のルーツへ思いを致している。

反抗期の子のごと一つ太陽に背を向けて咲く向日葵の花

福島県 大槻 弘

評 向日葵の花は太陽の動きについて廻ると言われるが、そのようにしない花もあるし、あつても良いと作者は思っている。あれは今、反抗期なのだと見ている眼差しがやさしい。

◆梅雨明けをひた待つところ携帯ポケットに娘むすめは送り来る淡き夕虹
兵庫県 前田あつ子
◆軒を借りたはずむわれの目の前の雨を斬り裂くツバメの
福岡県 三吉 誠
飛翔

◆亡き母の衣をほだきて袈裟にする過ぎし日思いつつ針を進める
茨城県 細矢 弘子

◆九十三歳数独三味楽しき日々余命僅かと悟りながらも
ロサンゼルス 井上 健一

◆水面に大きく口を開く鯉こいごめんねこは餌やり禁止
東京都 野村 信廣

◆新築の堂に移さむ開山像今日は大工ら白衣に着替ふ
山形県 斎藤 弥生

◆髪白く老いても恋しゆすら梅下校の足を速めし昔
愛知県 田中 澤子

◆視力増し不要となりたる老眼鏡なれどレンズの汚れを磨く
静岡県 高尾 善五

◆若き喪主母が誇りと挨拶す吾が集落はまだまだ元氣
福島県 佐藤 忠

◆足下に露草の花広がれど摘み取り難し摘めばしほむと
滋賀県 三田 和子

*選者詠

水澄めばスクリユ一の泡も玻璃の玉 永遠
ならざるものを航ひきゆく ちづ

*作歌小見

三田さんの一首、当たり前のことを言っているようですが、露草の花の儂はかさを言い得ています。複雑に表現すると、花は理屈で固められ強く丈夫になつてしまします。素朴に素直に詠うことについて再確認したいものです。



大本山永平寺



達磨講式だるまこうしき

永平寺川のせせらぎを覗く峯々の風光は、それぞれに秋の訪れを知らせてくれます。

祖山では、十月五日に達磨大師さまをお偲びする「達磨講式」を修行いたします。

達磨大師さまは、インドから中国へお釈迦さまの坐禅をお伝えになられた方で、お釈迦さまから数えて二十八代目にあたる仏教の伝道者です。

その、「達磨講式」でお唱えいたします「式文しきもん」に、このようなお言葉がございます。

「海底に渴を愁なふ」

これは、海中にどっぷりとつかっていながら、水を求めて愁いているということです。

この移ろいゆく天地自然の仏の営みの中にありながら、あえて「仏」とか「さとり」というものを創り上げ、探し求めて得られずにいるということのたとえです。そして、「仏」を掴もう掴もうとしている私自身が、まさにその掴もうとしている仏の内に抱かれていたということなのです。

私たちは、宗教や宗派、性別や職業などはそれぞれですが、同じ空の下、等しく尊い一日一日を生活しております。

それぞれが互いの幸せを願い、自らのありようを見つめる時に、皆と共に生きる「仏の姿」がこの身にあらわれてくるのです。永平寺川のせせらぎや山々の姿は、何も飾らずにそのことを教えてくれているようです。

「達磨講式」では、それぞれに与えられたお役目を、一心に修行する雲水方の姿が、何よりの達磨さまのご供養になるのだと心に留めているものがございます。

ご本山だより



大本山總持寺



対真上堂（御両尊御征忌）

御両尊御征忌

十月より冬安居制中に入り、首座和尚を中心に来年正月まで一〇〇日間の集中修行期間が始まります。

また、十二日から十五日までは御開山瑩山禪師・二祖峨山禪師（お二方あわせて御両尊と申します）をお慕いしての、「御両尊御征忌」が営まれます。この期間には、全国から選ばれた焼香師さまが禪師さまの御代理として法要の導師を勤められ、御寺院・檀信徒の方々も大勢参集して報恩の誠が捧げられます。

御征忌は、江戸時代は「開山・二代忌」、明治時代に入り「御忌」「御忌会」と呼ばれました。また御移転当初は春・秋に行われていましたが、昭和四年より現在の十月十二日から十五日の四日間となり現在に到っております。十二日と十三日が二祖峨山禪師の、十四日と十五日が開山瑩山禪師の法要となり、まさしく御両尊のための御征忌であるのです。

また、この春より改修工事に入っていました三松閣のリニューアルが終了し、いよいよ十月から研修道場として再開します。空調設備やバリアフリー・トイレの最新化など現代に則した設備となりましたので、どうぞ御参詣御参籠くださいますよう御案内申し上げます。

大本山總持寺／045-581-6021